

琉球大学学術リポジトリ

多読授業の試み：

「英語講読演習1・2」の実践を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東矢, 光代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41870

多読授業の試み

「英語講読演習Ⅰ・Ⅱ」の実践を通して

法文学部 助教授 東 矢 光 代

限られた時間内の英語の授業で、学生に何を教えるべきか、学生は何を学ぶべきか。それは私にとっていつも難題である。高校までの進学校では毎日のようにあった英語の授業は、大学入学とともに週2日～3日に減り、入試という目標を達成した学生の動機も一概に下がる傾向にある。1年次の間はまだしも、現行カリキュラムでは2年次になれば英語の授業時間は多くの場合週1回になり、3年次以降は共通教育の手の及ばないところとなる。語学は時間との勝負である。地道に時間を費やさなければ、力をつかない。自分で目的意識を持ち、勉強を続けていける限られた学生以外は、大学入学以降英語力が落ちていくのは必至の状態である。

では「英語力とは何か」という問いには、様々な答え方があるだろうが、英語教育の分野で最も浸透しているのは「～ができる」という表現で記述される「スキル」という考え方である。リスニング・スピーキング・リーディング・ライティングも「スキル分野」として捉えられている。1年次は週2回の「総合英語演習Ⅰ・Ⅱ」でこの4つのスキル分野を統合的に学習し、また大半の1年次生が「英語講読演習Ⅰ・Ⅱ」でリーディングを学ぶ。英語のリーディングにおいて、学生はもちろん「読むことができる」ようにならなければならない。伝統的な英語の授業のように「訳ができる」ことも、「読むこと」を前提としているだろうが、この授業で私が目指したのは訳をすることではなく、「学生に読ませること」である。

授業では「自分のレベルと興味に合った英語の読み物を、5万語読む」ことを課題とした。5万語というとおおよそ120ページ程度のペーパーバック1冊分にあたる。ハリーポッターの第1巻の、約3分の2の厚さだと思ってもらうとちょうどよ

い。この量を英語で読破するには、読む本人が面白いと思う教材で、レベル的に（特に語彙的に）無理のないものでなくてはならない。レベルも興味も異なる受講者に対応するために、様々な教材を準備し、選んで読んでもらう方式を取っている。

私は「好きなものを読む」授業を過去4年間、「特別英語演習」の中で実践してきた。そこでは「5万語」という達成目標は定めていなかった。「英語講読演習Ⅰ・Ⅱ」を担当するにあたっては、東京電気大学の酒井邦秀教授の提唱する「100万語読書」との出会いがあった。酒井教授は自らの実践を通して、「英語で読める」力をつけるためには、100万語を読破することが1つの達成点になると述べている。そしてその目標達成のために、語彙の難易度や文の長さを統制した Graded Readers という教材を、きめ細かに順列することで、無理なく挫折少なく100万語を読み通す方法を紹介している。

今回の実践の基礎となった特別英語演習の授業では、私が留学中に集めた本やアマゾンでよく売られていて面白そうだと思って買いためた本を使っていた。英語講読演習では酒井教授の著書を参考にさらに Graded Readers を買い足した上で、読んだ語数の計算をやりやすくするために、それぞれの本におおよその語数を書いて貼り付けた。

教室では前3列ほどの机上に数十冊の本が並び、学生は自由に本を選び、読むことができる。読み始めて途中でやめ、本を変更することも自由である。5万語は1冊で埋める必要はなく、200語程度の薄い絵本、3000語程度の少しまとまった読み物など、組み合わせも本人の裁量に任せている。こう言うと「やさしい、簡単なものばかり選ぶのでは？」と思われそうだが、そこはうまくできていて、500語の絵本ばかり読んでいては、100冊(!)

読まないといふ5万語に満たない。学生を見ていると、最初やさしいものをマイペースで読んでいた受講生が、学期途中くらいから、「あと〇語読まなくてはならないので、学期の後半はこれ1冊を読もう」と意外に難しい、厚い本に手を出す光景も見られる。あるいは2回目の授業あたりから、コンスタントに3000~5000語くらいのシリーズものを毎回読んでいく学生、あるいは以前興味を持って買ったちょっと難しい、厚いペーパーバック（5万語を超える）を、この際読破しようと持ち込む学生、その選び方や組み合わせは様々である。

5万語というのはあくまで目安である。もし酒井教授の提唱するように、「英語で読める」ようになるために100万語を読むことが必要だとすれば、5万語は最初の20分の1の走行距離に過ぎない。しかしまずは走ってみることが大切であり、さらにこの授業では、長い英語学習を楽しんで続けていける力が育つと考えている。自分の興味とレベルに沿って英語の読み物を選び、「5万語を読んだ」という達成感を味わう経験があれば、学期が終わったあとでも続けることはできるだろう。2学期連続で受講した学生は、年間10万語を授業で読んだことになるから、もし同じペースで自ら継続できれば、卒業までに40万語を読むことができる計算になる。

授業では90分の中の約60分を読む作業にあて、残りの30分でジャーナル・ライティング、読んだものをクラスメートに紹介するなどの活動を行なった。ジャーナルというのは学生が、読んだ本の内容や感想を書き留める個人ノートを指す。最初は日本語で、徐々に英語でのジャーナルに変えていく。毎回これを提出してもらうことで、全員一斉のテストを実施しなくとも、どんな本に興味があり、どの程度のレベルを読んでいるか、内容をどの程度理解しているか、本の内容からどんな示唆や共感を受けているか、多読に積極的に取り組んでいるか、などが読み取れる。コメントをノートに書き込んで返却することで、受講生はさらにやる気を見せる。また英語のジャーナルでは、英文の添削も行なう。

「英語を話す」活動としてはまず、2人組となつてパートナーに、自分の読んだ内容を英語で伝える活動を取り入れた。1分、2分など時間制限を設け、時間が来たら組を入れ替え、別の相手に話すようにすると、同じ内容を違う相手に数回話す練習ができる。聞くほうは常に違う情報なので実際のコミュニケーションに近く、話すほうは練習を重ねることでより流暢さを増すことが期待できる。持ち時間を長く与えすぎると、日本語で四方山話を始める傾向にあるので、途中であつても区切られた時間で相手を変えるように行なった。

ジャーナルでの英作文や2人組での口頭練習の応用として、クラス全体への発表がある。前に立ってクラス全体に英語で口頭発表することは、緊張を伴う。しかしまずはノートに書いて添削を受け、2人組で個人的に英語で話す練習をしていれば、全体への口頭発表への準備は整っていると考えられる。持ち時間は2人組のものより長く、3~5分くらいになるので、多くの学生は原稿を自主的に準備していた。受講生である1年次生は、人前で英語を話す経験をほとんど持っていないだろうと考えたので、発表に際しては、最初「Good morning, everyone. Today, I'd like to introduce (本のタイトル).」で始め、最後は「Thank you.」で終わるなどの指示も行なった。

「1学期で5万語を読む」の授業実践でも、全員が問題なく、やる気を持って多読に取り組んでくれるわけではない。授業時間をフルに活用し、時間外でも着々と読み進める学生がいる反面、学期末になってあわてて5万語に足りない分を、必死で読み始める学生もいる。この授業形式が合わなかったのか、最初の数回以降ドロップアウトする学生も数名いた。自分で自分の英語学習をデザインし、読むものを選び、読む癖をつける。ここでは読み手本人の自主性が問われ、「興味・レベルに関わらず、教師に読むものを与えられる」従来の授業とは趣が異なる。このような実践が万能だとは言わないが、学生の支持は受けており、「読めるようになるためには、読まなければならない」という考えには、十分理があると思う。